

「高校魅力化プロジェクト」が示す 学びの場が 魅力的になることの意味

島根県立隠岐島前高校での実践をベースに、全国各地の高校における「高校魅力化プロジェクト」に参画する教育政策アドバイザーの藤岡慎二氏。地域課題発見解決型キャリア教育などを進める氏の活動を俯瞰しながら、学びの場を魅力的にすることの意味を考える。

取材・文／堀水潤一 撮影／平山 諭

Introduction

生徒数が減少していく時代に、学校をどう魅力化するのか？

「どのような生徒を育てたいか、そのためにはどういう教育が必要か」といった志の共有があり、その地域・高校ならではの学びがあり、学校内外の教育資源をフル活用して学びの場の魅力が高まれば、たとえ離島や中山間地域であつても、生徒は集まってくる。それを実証しているのが、全国各地で「高校魅力化プロジェクト」という教育実践に身を投じている教育政策アドバイザー、藤岡慎二氏（以下、敬称略）だ。

高校魅力化とは、言い換えれば、学びの場の魅力化・魅力づくりのこと。その具体的な教育実践に触れる前に、氏が話してくれた、ある畜産農家で育った高校生の進路選択のエピソードから紹介したい。

「A君は、『人生に必要なことはすべて牛に教わった』と話すほどの牛の世話好き。大学の畜産学部へ進学したのち、家業を継ぐことを考えていました。しかし、『夢ゼミ』（後述）とい

教育政策アドバイザー 藤岡慎二氏

ふじおか・しんじ●1975年生まれ。慶應義塾大学大学院SFC政策・メディア研究科修了。大学院での研究がきっかけでキャリア教育や推薦・AO入試対策、社会人基礎力の指導や教材・プログラム開発を予備校や高校・大学で行う。現在は行政・自治体と協働し、教育を通じた地域活性化に取り組む。参画した島根県立隠岐島前高校魅力化プロジェクトは、離島中山間・僻地の公立高校のモデルとして知られ、現在も全国各地の高校で魅力化プロジェクトを実践中。近年は定住促進や若者の自立支援事業も実施。総務省地域力創造アドバイザー。2017年度から大学の経営学部教授に就任予定。地域での起業家、社会起業家、アントレプレナーシップ育成などの人材育成や、自治体における公共政策の研究や教育活動を行う予定。



図2 「島前高校魅力化プロジェクト」ホームページ



<http://miryokuka.dozen.ed.jp>
同プロジェクトについては、『未来を変えた島の学校』(岩波書店)にも詳しい。

活動につなげることも重視された。

取り組みの結果、島での学びに魅力を感じた生徒が島内外、さらには海外からも集まるなど、入学者数はV字回復。異例の学級増も達成した。「人間関係が固定化しやすい過疎地

にあつて、島外から来た多様な生徒とのふれあいは島の生徒に火を付け、学習に向かう空気も生まれました。キャリア教育や探究学習が推薦・AO入試対策につながったこともあり、3割近くが国公立や難関私立大学に進学するようになりました」

この島を日本一幸福度が高い町にしたい」と語るなど、地域や社会のために活動する卒業生も増えてきた。

その地域・高校に根差したカリキュラム改革が柱

隠岐島前の実践をベースに、藤岡は各地の高校魅力化プロジェクトに関わっている。そこには図3のように3つの柱があるが、このうち公営塾や教育寮は、地域事情に深く関わることなので詳しくは触れない。ただ、いずれにしろプロジェクトの核心はハードよりも学びの中心にある。

「各校での学びを魅力的なものにしようとすると、有効なのが総合的な学習の時間や学校設定科目です。そこで独自の授業展開ができれば、教育のブランド化が図れるでしょう」

その際、藤岡が勧めるのが、土地の歴史から紐解く方法だ。「それぞれの地域には歴史や文化があります。生徒が身近に感じる、そうしたテーマを深い学びへと昇華させていくのです」

例えば、広島県立大崎海星高校の場合、水軍の子孫が、瀬戸内海の変化が激しい潮目を読む知恵を活かして社会の潮流を読み、造船や海運で栄えた歴史がある。そこから、予測不能な社会を読み解く「潮目

問題を選ぶのではなく、発見できるかどうか

学」や、自らの方向性や志を立てる「羅針盤学」という独自科目を設定。また、長野県立白馬高校の場合、白馬村には古くは塩の道として日本海側と太平洋側の交流があり、戦後、観光地化によって都市部の人、近年はインバウンドにより海外の人との交流が盛んだ。こうした地域性を活かし、県教委と高校、白馬村、小谷村で協議した結果、国際観光科が設置されたと言う。

「地域特有の文化を受け継ぐ学びは、その地域でしかできません。私は文化遺伝子と呼んでいます。これに紐づけることで、学びに対する興味が増え、同時に、高校と地域が深く連携できるようになります」

地域特有の学びをきっかけに、出番が増えた大人は、生徒を子ども扱いしない。課題解決に向けた生徒の提案に対して、実現可能性など厳しい質問も飛ぶ。そうしたなか、大人を納得させるには、実は普段の勉強が大切であることに気づいていく。

こうした課題発見解決型学習に

おいて大切なのは、テーマ設定だと藤岡は言う。なぜなら、通常の授業のように、考え方の筋道はもちろん、正解すらあるとは限らないからだ。

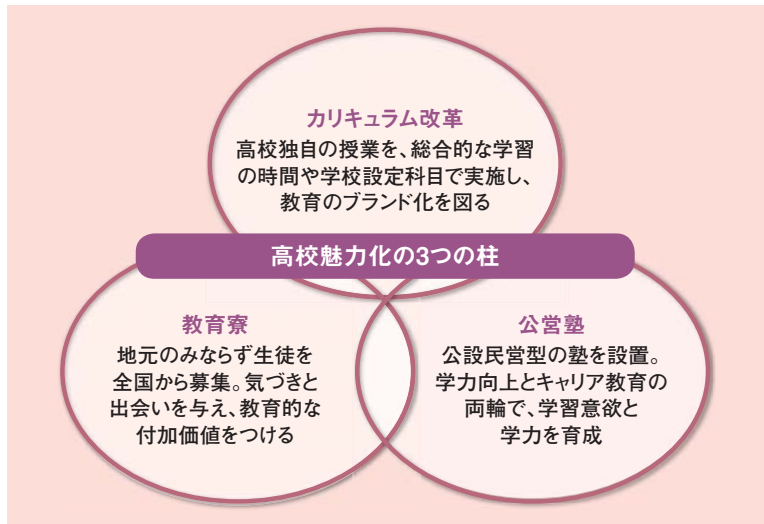
「大人ですら難しい作業にストレスを感じるはず。それを乗り越えるくらい熱中できるテーマでなければ、挫折してしまうでしょう。生徒はよく貧困問題や少子化問題などをテーマに掲げますが、表出化している問題に取り組むことが、課題発見解決能力を向上させるとは限りません。問題を選ぶのではなく、発見できるかどうか。本当の問題は隠れています。そこを掘り返し、課題を自分事化することが肝心です」

そのためにはまず、自分の価値観とは何かを明らかにする作業から始めるべきだと言う。

「ヒントは、日常にあります。クラブや委員会活動、職場体験や修学旅行などの過程で、どのような壁があり、どう思考して、どう行動したかを生徒自身に言語化させるのです」

そうやって自分の価値観に気づい

図3 高校魅力化の3つの柱



様々な角度から見ないと
真の人間像は浮かんでこない

た生徒には、「こういう自分だからこそ、この問題に取り組みたい」という確固たる軸が生まれると言う。

新しい学びを組織内に
いかに浸透させるか

ひとりで、学びの場の魅力化といっても、新しい取り組みをゼロからスタートするのは容易ではない。

「『夢ゼミ』もそうでしたが、まずはノウハウをもつ人が手本を示し、研修などで全員が主体者として体験してみる。そこで狙いや効果を納得してもらったうえで、徐々に組織に浸透させていくしか方法はありません。生徒に成長の兆しが表れれば、それならやってみようかという賛同者が徐々に増え、進学実績などの数字につながれば、懐疑的だった人たちも巻き込まれていくと思います」

もう一点、民間の立場で高校と連携してきた経験から、藤岡には伝えたいことがある。

「同じ生徒でも、授業中と部活動中とで表情が異なることがあるよう

に、地域の人と関わっているときも、生徒は別の顔を見せるもの。様々な角度から見ないと本当の人間像は浮かんでこないものです」

高校と地域が一丸となり
生徒のための学びの場づくりを

教員同士の情報交換や意識の共有が必要だと言われるのもそのためだ。

統廃合によって消える高校が増えている。その数、1年間に50校ほど。そこに藤岡は危機感を抱いている。

「高校に教育力がないと、優秀な生徒ほど地元から出て行く現象が生じます。まして近隣に高校が1校もないと、子育て世代が移住してくることはありません。そうやって過疎化が進む地方には諦めのムードが広がり、それは子どもたちにも伝染します。夢さえもなくなるとはあまりにかわいそう。教育を核とした地域活性プロジェクトに挑み続けているのは、そうした理由からです」

現在、藤岡が関わっているプロジェクトは、北海道の羽幌町立天売高校

から、沖縄県立久米島高校まで全国に広がっている。なぜ、離島や中山間地域を中心に活動しているのか。「課題先進国といわれる日本の中の、課題先進地域だからです。人口減少、少子高齢化、財政難など、近いうちに日本全体が直面するであろう課題がすでに顕在化しています。それは同時に、現に深刻な課題に立ち向かっている大人の生の話が聞けるということ。そうした課題に向き合うことも、これからの学び。20〜30年後の社会が到来しているからこそ、ここでの学びは、他地域でも生きてくるはずですよ」

もちろん、都会には課題がないかというところ、そんなことはなく、見えにくいだけだ。課題の無い地域もなく、それぞれの場で、同様の取り組みはできると藤岡は言う。

「いずれにしろ、これからの社会を生きて働いていくうえで必要となる資質・能力を、高校と地域が一丸となつて本気で育てる。そういう学びの場づくりが大切です。できれば、私たちのような外部の教育資源うまく活用してください。若者を育てたいという思いをもつNPOや企業は少数ではありません。問題を抱え込まず、仕事を分け合い、共に力をつくしたいと思っています」